

『現代都市之研究』

片岡安 著

建築工芸協会 [刊]

1916年12月 23cm/458頁 図書番号OB-0109

片岡安は1897（明治30）年東京帝国大学卒業後、建築家となり、1905（明治38）年に建築界の大御所であった辰野金吾と共同設計事務所を開設した。1917（大正6）年に関西建築協会（のちの日本建築家協会）を有志と設立し、自ら理事長となった。また、大阪市の都市改良計画調査会をはじめ、都市計画調査会や帝都復興院評議会など多くの委員を務めた。

片岡は本書を執筆した理由を序で次のように述べている。「都市のあらゆる政策のなかで最も根本的な経営は都市の大改造である。欧米諸国は一斉にその研究を行い、その実施に苦心しているが、日本はその重要性を理解できていない。このような大問題は、その都市全体の世論と先覚者の努力によって方針を定め、あらゆる専門の知識と技術とを総合して初めて成功するのである。本書は欧米大都市の経営やその事例を紹介して、わが国の都市経営者を啓蒙することにある。」

片岡は都市の膨張によって引き起こされた都市問題を解決するために最も必要なことは、都市計画と住宅政策であると主張する。

都市計画の核心におかなければならぬのは、交通体系と街路体系の整備である。彼はその理想としてアメリカのワシントン市やフランスのパリ市の計画を挙げている。ワシントン市は、連邦議会議事堂と大統領官邸を中心とした放射線状の道路を基軸として、格子状の街路が造られている。これによって車の渋滞を防ぐとともに、将来都市が成長したときに中心をいくつも造れる構造となっている。また、パリ市は、市内の各所に中心点を置き、そこから放射線状の街路が拡がる。それと同時に、各中心は非常に幅広い大通りで連絡され、市全体が円形の優美な形となっている。日本でも街路計画を確立して、現在の不便や不調和を無くし、将来の発展に支障のない計画を樹立することが必要であると説く。

また、都市計画と同様に大事なことは、人口集中によって引き起こされた衛生問題や住宅問題の解決であると述べる。そのためには、上・下水道の完備や劣悪な住宅の改良が重要であると指摘する。そして、英國の取り組みを紹介している。

英國で飛躍的に公営住宅が建設されるようになったのは、公衆保健法（1875年）と不健康住宅地区の改良や労働者への住宅供給を定めた労働者階級住宅法（1890年）によってである。これらの法により自治体は、貧民街を取り壊し、衛生的な公営住宅の建設を行うことができるようになった。また、都心の改良に加えて、自然の豊かな郊外に工場と労働者住宅を設ける「田園都市」の建設もE・ハワード等によって行われた。

わが国ではこの10年来、大都市近郊が居住地として開発されているが、いずれも周辺と調和なく孤立的に開発されており、道路や上下水道などの整備が不十分であるとして、自治体が秩序ある開発に関与すべきだと述べている。

片岡は都市改造と田園都市建設は、規模や設計においては異なるが、双方とも現代社会の改良を促進するという点では同じであると結論付ける。本書は、都市計画とは何か、何のために行うかを紹介した日本で最初の本格的な啓蒙書である。

（平田幸子・市政専門図書館司書課長）